

消えた天然沼 品井沼の明治・大正期の漁業と現在の魚種

三浦仁一（シナイモツゴ郷の会）

【品井沼の概要】

仙台平野にはその地勢的特徴から多くの天然池沼が存在したが、時々々の施策によりその殆どが縮小若しくは消滅している。

その中でも品井沼は県内で最大の沼（東西約 6 km、南北約 3 km、面積約 1 8 km²）であり、周辺は水害の常習地でもあった。

そのため、水が出たときの男たちは、農作業を放り投げて魚とりに精を出したと言われている。大きな舟で何ばいかの魚をとっては売りに出し、田仕事以上の収入をあげた。

だから沼が干拓されて田になるとは言っても、水害があるのではむしろ沼のままで魚をとり続けた方がどんなに良いだろうと思ったという。

そんな品井沼にはどんな魚がいてどんな漁法が行われていたのかまとめてみた。

【明治・大正期の品井沼】

表 - 1 に漁業者、表 - 2 に舟数と漁獲高を示しているが、明治 2 4 年頃までは専業・兼業で 2 0 0 人を超える従事者がおり、同じ時期の舟数で見ると 2 0 0 隻近くが保有され、漁獲高も 7 0 0 円前後で推移している。

明治 2 5 年頃の米が 1 俵当り 2 . 5 円だったので約 2 8 0 俵相当の漁獲高となる。

なお、明治以降の 1 回目の品井沼干拓が明治 3 4 年から大正 9 年まで行われているが、この頃から舟数、漁獲高が減少してきており、漁業者の数も同様の傾向があるものと思われる。

図 1 大正と現在の品井沼



表 - 1 漁業者数

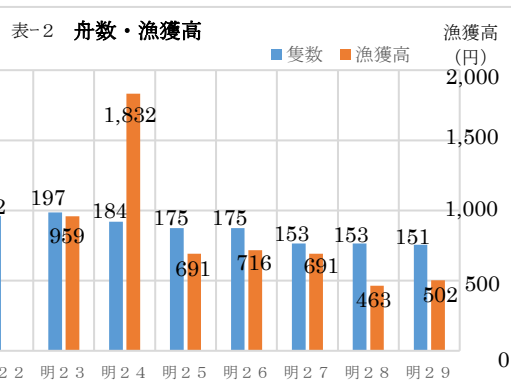
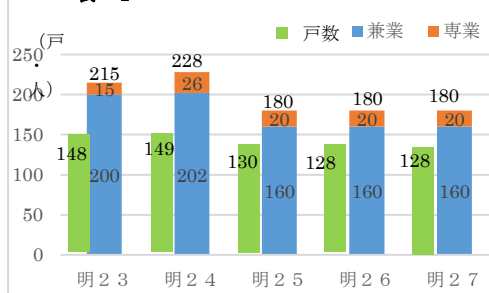


表 1. 2 出典：わが鹿島台

【沼に生息していた魚】

品井沼に生息する魚の調査は、Okada 等により品井沼を含む東北地方で実施され、昭和 13 年にその調査報告が行われた。

実施時期は昭和 5 年から昭和 8 年頃で、丁度品井沼が沼からの水を吉田川を横過し高城川を経て松島湾に排水するサイフォン工事が行われる直前の、品井沼としての最終の時期であるが、その結果表 - 3 に示す計 17 種の魚が確認されている。

【沼で行われていた漁法】

前述の魚のうち、鹿島台の文化財（第 5 集）や鹿島台町史に、フナ・えび・どじょう・うなぎについて具体的な漁法が記述されている。

ふなは、「釣ぶな」といって、60cm ぐらいずつ離し針を 120 本つけて一枚としたものを 30 から 40 枚とかけ、ひと朝に 150kg ぐらいとったという。

うなぎは、「ウナギ搔き」（図 2）も壮観な漁法で、一艘の舟で 1 日 500 匹から 800 匹も搔き上げたというから大したものである。

どじょうは「どじょう胴」を使って捕り、秋さかには 70 貫をまとめて売られたようだが、値段は 1 貫 50 銭ぐらいなので結構な収入のようだった。

えびは網が用いられたが、一晩に 3 斗から 4 斗（540 から 720）ぐらい獲れ、えび漬や干えびにすると、えび一升が米一升と同じ値段がついて大分評判が良かったという。

【現在旧品井沼に棲む魚】

表 3 で示すとおり旧品井沼には 7 種の魚が確認されている。場所は地域の排水本線となる河川や地域内の連絡水路などで、生業としてではなく趣味の魚捕りとして行われている。

表 3 1930 年代の品井沼と現在の旧品井沼周辺で採集された魚類在来種

	魚種	1930 年代の品井沼宮城県 ¹⁾	現在の旧品井沼 ⁴⁾	現在の中核ため池 ^{2,5)}	旧品井沼周辺の里山里地の小川 ⁵⁾
1	スナヤツメ	○			○
2	コイ	○	○	○	○
3	フナ	○	○	○	○
4	カマツカ	○			
5	シナイモツゴ	○		○	○
6	アブラハヤ	○			○
7	ゼニタナゴ	○		○	○
8	タナゴ	○			
9	アカヒレタビラ	○	○		○
10	ドジョウ	○	○	○	○
11	ホトケドジョウ	○			
12	シマドジョウ	○		○	○
13	ナマズ	○	○		○
14	ギバチ	○		○	○
15	ミナミメダカ	○	○	○	○
16	ヨシノボリ類	○	○	○	○
17	ジュズカケハゼ			○	○
18	ニホンウナギ	○			○
魚種数		17	7	10	15

1)Okada et al 1938、2)高橋他 1995、3)藤本泰文他 2008、4)高橋清孝 1997、5)高橋 2017

*1 在来種のみ記載、外来種、移入種を除く。

*2 在来の淡水魚は大半がため池や周辺河川で生息できる。

図 2 ウナギ搔



渡辺勝治氏所蔵